

和泉式部日記の表現と作者

加藤 晴子

和泉式部日記には作者を和泉式部以外の者とする説が以前からあり、自作説に落ち着きつつある現在でも確固たる定説はない。

他作説の論拠は様々であるが、現在残されている最大の論点は、自分の見聞きしていない事柄を推量や伝聞の形でなく記す和泉式部日記独特の表現方法である。

これを、鈴木一雄氏は「超越的視点」と名付けられ、次のように定義された。

とかく物語の叙述と混同されがちなこの『日記』の視点が、もとより第一人称叙述と直結する限定視点とはいいがたいけれども、物語類のもつ全知視点、全能的視点とも異なつた、狭い限界をもつ視点であること、そして、一人称とも三人称ともつかぬ、内側の心理的秩序に沿つた主客未分ともいふべき叙述に密接にかかわることなどを考慮して、自己流に名づけた。(以下略)⁽¹⁾
つまり、和泉式部日記の視点は、物語類の「全能的視点」や、一般的な日記文の「限定視点」と分けて「超越的視点」と名付けられ

たのである。現在では、多くの人が、この語を用い定着しつつあり、私も使わせていただく。

この超越的視点は、他の日記において皆無であつたわけではない。蜻蛉日記の場合、ほとんど、「……といふ」「……と語る」「……といふを聞く」「……などあるを聞く」など、伝聞は伝聞、推量は推量、の表記を守っているが、例外もある。鈴木一雄氏は、蜻蛉日記における超越的視点の芽生え、ともいふべき部分を何箇所か指摘された。その中から二箇所を選び、考察してみる。⁽²⁾

道綱の母が結婚して十二年目、兼家は作者の家で発病する。病状が重くなつて兼家邸へ帰らうとする時の描写、

かき起こされて、人にかかりてものす。うち見おこせて、つくづくうちまもりて、いといみじと思ひたり。

は、動作の主体が兼家である。「つくづくうちまもりて」までの動作は、作者もその場で見ていたわけであるから、想像して書いたのではないが、次の「いといみじ」と思ったのは兼家である。短

い言葉ではあるが、作者を見つめた兼家の心境を推察し、それを推量の形でなくあらわしている。同じような例として「いとをかしと思ひけり」がある。

兼家の病状は快復にむかい、自筆の手紙が届く。

「いとあやしう、おこたることもなくて日を経るに、いと惑はれしことはなければにやあらむ、おぼつかなきこと」などひとまにこまごまと書き添えてあり。

「こまごまと」の語からは、自筆の手紙をもらった作者の嬉しかった気持ちが感じられる部分である。「こまごま」と書いてあることは手紙を読めばわかるが、「ひとまに」書いた手紙であることは、作者の想像の域であると思われる。兼家邸の事情を知る作者が推し量ったものだろう。以上のように、この程度のものなら蜻蛉日記にも超越的視点が用いられていたことがわかる。

鈴木氏は、超越的視点の採用には、蜻蛉日記のように「多人数を不手際なく描くため」と、和泉式部日記のように「ただ二人だけの世界を追求する眼」という二つの必要性が存在する、とされた³⁾。

この説は、いかがなものであるうか。蜻蛉日記の場合は、養女を迎える話、道綱の恋愛など、作者でも兼家でもない第三者の登場を、視点を移動させながら上手に処理し、しかも、明らかに物語の視点とも異なり、多人数描写として成功している。しかし、和泉式部日記における超越的視点は、単に「対象である一人の人の心の中に入り込むため、自由に主体を転換した」表現だろうか。私は、そのような漠然とした理由だけではない、と考える。

以下、本文の展開を追いながら超越的視点を再検討し、その目的や必要性について考察してみたい。そこから、自ずと作者の姿も明

らかになるのではないだろうか。便宜上、区分は、『日本古典文学全集』本の段落を使うことにし、ゴチック数字で示す。また、超越的視点の部分には、引用文の初めに算用数字で番号をふる。

1 情緒深い叙述に始まる起筆部分は、読者に、ごく自然に和泉式部の筆になることを察知させる。小舎人童という重要な脇役が登場し、式部との会話がある。ここでの式部の言葉は、「……と言はれて」「……と思ひて」と一人称で受け、小舎人童は、「……とて」「……と語る」と受けており、女の立場から書いてある。ところが、女が「……と聞こえさせたり」と返事を渡すや否や、急に場面は師の官邸に移り、「まだ端におはしましけるに」と、動作の主体は師の官に変わる。

① まだ端におはしましけるに、この童かくれのかたにけしきばみけるはひを、御覧じつけて（申略）賜ふとて「かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」とて、入らせたまひぬ。(p86)

この長い超越的視点の部分で注意したいのは、「かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」という宮の語である。これは、その少し前に書かれている女の心中思惟

あだあだしくもまだ聞こえたまはぬを。(p86)

に対するのではないだろうか。このあとは、宮の歌を童が女の所へ持っていく描写に続く。したがって女は、童から官邸での様子、宮の言葉や聞くことができただろう。そのことを覚えていた為、作者が執筆する際こうした調和のある表現になったのだと思われる。

2 「かくて、しばしばのたまはする、御返も時時間こえさす」という状態が続いたあと、初めての来訪になる。

② 思ひかけぬほどに忍びてとおぼして、星より御心まうけして、日ごろも御文とりつぎて参らする右辺の尉なる人を召して「忍びてものへ行かむ」とのたまはすれば、さなめりと思ひてさなめり。(p88)

「思ひかけぬほどに」から「御心まうけして」までは、後に親しく話すようになった頃、宮から聞いたのかもしれない。また、右近の尉の「さなめり」は、普段から手紙の取り次ぎをしている右近の尉が、式部の側近に、宮の訪れを伝える時話したとも考えられる。これは、第三者が宮の心中を推量するという、ごく特殊な例に属するが、「さなめり」と一語の簡単な言葉にすぎず、作者の想像であるにしても、容易に考えられる程度のものである。

宮は「かろがるしき歩き」もできない身なので、

③ かくて明かすべきにやとて (p89)

と、女を誘う歌を詠む。この「かくて明かすべきにや」は宮の心中思惟という形をとっている。ところが、これは次の歌、

はかもなき夢をだに見て明かしては なにをかのちの夜がたりにせむ (p89)

に密接に続いており、あたかも詞書のような役目を果たしている。より歌の効果をあげよう、という作者の意識が働いたのではないだろうか。

後朝の歌贈答の後、小舎人童が来たのに宮の文はない。女は失望して、童が帰る時に歌を託す。ここで視点は宮に変わり、

④ 御覧じていとほしうもおぼせど、かかる御歩さらにせさせたまはず。北の方も例の人の仲のやうにこそおはしまさねど、夜ごとに出でむもあやしとおぼすべし、「故宮のはてまでそし

られさせたまひしも、これによりてぞかし」とおぼしつづつも、ねんごろにはおぼされぬなめりかし。(p91)

の超越的視点がある。この部分は、帥の宮、北の方、女、とさまざまな方向から見た思惑がいり乱れ、複雑な言い回しになっている。一応、宮の心中思惟の形をとっているが、種々の点で破綻をきたしている。最初の二行をみても、女側の心情が作用したため、「御覧じて」「おぼせど」「御歩」「せさせたまはず」と、宮自身の行為に敬語が用いられている。次の「北の方も……」の部分は、そのまま女の思惑であったと考えられる。「故宮のはてまで」云々も、そのあとで「ねんごろにはおぼされぬなめりかし」と、女側の感想によって結ばれた為、帥の宮の心情表現として徹底していない。この部分は、結局、女の歌をみても、お出かけにならなかつた宮を「ねんごろにはおぼされぬなめりかし」と感じた女の言葉を書きたかつたのだろう。しかし、一方的に宮を非難はしない。北の方の思惑、兄宮のことから言われ続けている女への非難、こうしたことが宮の足をひきとめている原因だろう、宮の愛が足りないせいではなからう……と良い方向へ解釈しようとしている。ここに、作者が女、つまり式部であったという姿勢を感じる。

⑤ おはしまさむとおぼしめせど、うひうひしうのみおぼされて日ごろになりぬ。(p91)

⑥ 疲れて寝てしまった女は宮の来訪に気づかない。そこで宮は、聞こしめすこともあれば、人のあるにやとおぼしめして、やをら帰らせたまひて (p94)

ということになってしまふ。翌朝、宮から届いた歌と、これに対する女の返事から、式部の陰の男性が二人の間で問題になっていることがわかる。したがって、「聞こしめすことも」のために「人のあるにや」とお思ひになったことは判然としている。また、「やをら帰らせたまひて」は、門をたたくの聞きつけた人がいないことから判断したのだろう。

女は誤解を強調するが、宮はいらっしゃらない。その理由を想像したのが次の、

⑦ 今宵もおはしまさまほしけれど、かかる御歩を人々も制しきこゆるうちに、内大殿・春宮などの聞こしめさむこともかろがるしう、おぼしつむほどに、いとほるかなり。(p94~p95)

である。周匝は、冷泉天皇の第四皇子と、受領階級の噂の多い女との情事としかみななかっただろう。この「いとほるかなり」は、女の受けとめた感じ方である。宮の心情を表現しようとしたのに、文末で作者の意識が吐露してしまつたのであろう。

5 宮は、

⑧ 一日の御返りのつねよりももの思ひたるさまなりしを、あはれとおぼし出でて、いたう降り明かしたるつとめて、(p96)

と手紙をだす。女は豪雨にかこつけて恋しさを訴える。その手紙を受けとつた宮は、

⑨ なほ言ふかひなくはあらずかしとおぼして (p96)

返歌を贈られた。この8、9の例は、ともに手紙や歌を贈る前の詞書的作用を果たしており、また、女に対する宮の心情表現であることも共通している。女は自分の歌が、どのような効果を相手に与えるか熟知していたのだろう。

ここで、「日記」は一つの転機を迎える。宮の母親代わりともいふべき強い発言力を持つ乳母の諫めである。

⑩ おはしまさむとおぼしめして、薰物などせさせたまふほどに (p97)

という宮の行動に対する超越的視点の描写に続いて、乳母の言葉が書かれている。長文のため引用を省略するが、世間の批判や身分の差など、すでに二人の間で問題になったことが述べられているにすぎない。ただ、召人に関する点だけが初めて提出された問題である。つまり、作者は、宮にとって不都合なことの多いこの恋を述べた上で、宮邸へ召人として女を呼び寄せる手段が存在するということを、明らかにしたかったのではないだろうか。

乳母に諫められた宮は、

⑪ 「いづちか行かむ。つれづれなれば、はかなきすさびごとするにこそあれ。ことごとしう人は言ふべきにもあらず」(p98)

と答える。これは、むしろ女の心境であつたろう。この情熱も、宮の亡くなった執筆時点から考えれば、結局は「つれづれ」を感める「はかなきすさびごと」に過ぎなかったのかもしれない、と感じたのだろう。

宮は、内心迷い始める。

⑫ 「あやしうすげなきものにこそあれ、さるはいと口をしようなどはあらぬものにこそあれ。呼びてやおきたらまし」とおぼせど、さてもまして聞きにくくぞあらむとおぼし乱るるほどに、

おぼつかうなりぬ。(p98)

木村正中氏は「さてもまして聞きにくくぞあらむ」の語に注目し、男女の情事はとかく中傷的となる、という理由でも不徹底だし式

部を召人にすることも宮の側からみれば特殊な条件ではないこと、家庭的紛糾の予想とみるのも妥当でない、などの理由から、

「さてままして聞きにくくぞあらむ」は式部の側から出てくる言葉ではあつても帥宮の側から出てくる言葉ではありえなかつた。⁽⁴⁾

と述べられた。「さてままして聞きにくくぞあらむ、とおぼし乱るるほどに」も「おぼつかなうなりぬ」という結びの言葉も女側の語であり、式部の著作であることを感じさせる部分である。

6 外泊という画期的な出来事の記述の中にも、

⑩ 上は、院の御方にわたらせたまふとおぼす。^(p100)

と、北の方の心情を記している。これは、燃えている時でも、どこか醒めたところのある式部の性質のあらわれではなからうか。

7 二人の愛情は高まりつつあったのに、宮は、女の家の前にあつた車から、つまらない誤解をする。

⑪ 「車はべり。人の来たりけるにこそ」とおぼしめす。むつかしけれど、さすがに絶えはてむとはおぼさざりければ、御文つかはす。^(p102)

憤慨したにもかかわらず手紙をくれた宮の心情を、女は「むつかしけれど、さすがに絶えはてむとはおぼさざりければ」と理解したのだから。「車はべり」の件は、後に宮と和解した時に聞いたと思われる。

その後、

⑬ 宮は、一夜のことをなま心憂くおぼされて、久しくのたまはせで。^(p102)

という日々が続く。「なま心憂く」の一言が宮の心情であり、や

はり超越的視点の単純な例であらう。

8 月の美しい夜、女は歌を種洗重に託す。

⑭ 御前に人々して、御物語しておほしますすほどなりけり。人まかでなどして、右近の尉さし出でたれば、「例の車に装束せさせよとて、おほします。^(p103)

この宮邸の描写は、次に続く、

女は、まだ端に月ながめてあたるほどに、^(以下略)^(p103)

の伏線になつている。「まだ」と記すほど女を待たせた原因を明らかにする必要があつたのである。宮は手紙を扇の上に置いてさし出し、女が言葉をかけるには離れすぎていた。しかし、もっと近くで心のうちを話したいのは女だけではなない。

⑮ 宮も上りなむとおぼしたり。^(p104)

この「宮も」の「も」がそれを表わしている。「上りなむ」と宮も感じた、というのは、恋愛関係にあつた二人であるからこそ女の側から察せられたものであり、見過ごしてしまうほど自然な叙述である。

女の純情さにうたれた宮は、

⑯ 人の言ふほどよりもこめきて、あはれにおぼさる。「あが君や」とて。^(p104)

と、帰宅をとどまる。さまざまに噂されている自分と、本当の自分の違いを女は知っていた。したがって、自己弁護ともとれるほどに強調している。

女に対する疑いが晴れたわけではないので、

⑰ 宮も言ふかひならず、つれづれの慰めにはおぼすに、ある人々聞こゆるやう、(中略)など、口々聞こゆれば、いとあはあ

はしうおぼされて、久しう御文もなし。

(pl10)

と、また跡絶えてしまふ。ここでも「ある人々聞こゆるやう」「口々聞こゆれば」など、女への悪い噂や官の不信感、すべて口舌がない世間の人々の為す業である、と訴えている。こうした描写も、作者が式部である証拠の一つになるう。

10 七夕の贈答歌のあと、

⑩ とあるを御覧しても、なほえ思ひはなつまじうおぼす。(pl17)と、官の心情が記されている。その後、突然明るいうちに訪れたことから推察したのでらう。

11 石山詣は、女に、久しぶりて優位に立つ機会を与えた。

⑪ 官、久しうもなりぬるかなとおぼして、御文つかはすに、童「一日まかりてさぶらひしかば、石山になむこのごろおほしますなる」と申さすれば、「さは、今日は暮れぬ。つとめてまかれ」とて御文書かせたまひて、たまはせて (pl19)

例1と似ているこの例も、小舎人童から聞いたと思われる。童の言葉が詳しく、官の言葉は簡単に説明的でないことから、作者が物語のように、すべての人物を公平な立場で叙述していないことがわかる。

地理的に離れていることが、二人の心を一層緊密なものし、石山から帰ってきた童に対して官は、

⑫ 「苦しくとも行け」 (pl11)

と命ずる。小町谷照彦氏は、この言葉を、

式部の距離感から来る感動を持続させようとするものに他ならない。(5)

と解釈された。官が「苦しくとも行け」と命ずるほど激しい感情

であったことを記すことによつて、女と官が二首ずつ贈答していく気持の高揚した状態を緊張感を失わずに描写しようと考えたのだらう。

女は、

⑬ 思ひもかけぬに行くものにもがなとおぼせど、いかでかは。(pl12)

と、無意識に官を弁護する。官の気持を記すつもりで、自分の心情が反映した表現になつてしまひ、文末では「いかでかは」と、諦めに似た女の言葉と重なりあつている。次の、

⑭ げにさぞあらむかしとおぼせど、例のほどへぬ。(pl13)

も例21と同じ用法である。微妙に屈折していく意識を、そのまま反映した文章だが、少しも不自然でない。これが、和泉式部日記独自の文体である。

12 初めての来訪の時、五月の外泊の時、いつも二人の心が寄り添う時に登場した「月」が、ここでも重要な役割を果たす。

⑮ 九月二十日あまりばかりの有明の月に御目さまして、「いみじう久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらむかし。人やあるらむ」とおぼせど (pl13)

すべての自然現象に鋭敏な二人は、「きつと相手も、この月を見ているだらう」と感じあうことができたのである。

女は手習いの文を贈るが、官は、

⑯ うち見たまひて、かひなくはおぼされねど、ながめらむにふとやらむとおぼして、つかはす。(pl16)

と歌を五首だけ贈り返す。これは、女の長い手習いの文に対して「あへなきこち」がするほど、すぐに返事を寄こしたことへの説

明ととれる。

14 この「手枕の袖」応酬の段は「日記」中の山場ともいふべき部分である。女は寂寥感にかられて、うつ伏してしまふ。これを見ても、
て宮は、

⑳ 「人のびなげにのみ言ふを、あやしきわざかな、ここにかくてあるよ」などおぼす。あはれにおぼされて (p119)

と、強く女にひきつけられる。これは例16とほとんど同じ用法だろ。

翌日、宮が歌を贈る前の、

㉑ 頼もしき人もなきなめりかしと心苦しくおぼして (p119)と、

㉒ をかしとおぼして (p120)は、いずれも詞書の用法とみられ、例8、9と同様である。

十月十日を境に、二人の仲が一步前進するに至った宮の心情的変化を伝える目的をもって書かれたと考えられる超越的視点が、

㉓ 心からにや、それよりのち心苦しとおぼされて、しほしはおはしまして、ありさまなど御覧じもてゆくに、世に馴れたる人にはあらず、ただいとものはかなげに見ゆるも、いと心苦しくおぼされて (p120)

の部分である。お互いの愛情を根底に、小さな起伏を続けながら、宮邸入りまでの日々は過ぎていく。

小舎人童遅参事件も、こうした時期の出来事である。美しい月を眺め明かした翌朝、女は宮に歌を贈る。宮も贈ろうとしていたのだが、童がいなかったため、女の歌の方が先に着いてしまう。この、
㉔ 例の御文つかはさむとて、「童参りたりや」と問はせたまふ

ほどに (p123)

と、

㉕ ねたう先ぜられぬるとおぼして (p123)の超越的視点は、童が「今まで参らずとてさいなむ」と女に告げていることから、童に聞いたものと考えられる。

15 「秋の夜の月」に関する贈答のあとの

㉖ おしたがへたるこちして、「なほ口をしくはあらずかし。いかで近くて、かかるとはかなしごととも言はせて聞かむ」とおぼし立つ。 (p126)

は、女の歌に対する評価と、宮邸入りを結びつけるためのものだらう。

連歌を詠んだ際、宮は女のみごとな付句に対して、

㉗ なさけなからずをかしとおぼす (p127)

との感想を抱く。また、女は宮について、

宮の御さまいとめでたし。御直衣にえならぬ御衣、出だし桂にしたまへる、あらまほしう見ゆ。 (p128)

と感じる。例31、32は、この宮への賛美を書きたいが為にとった方法ではないだろうか。宮は女の精神的なことについて述べているのに対し、女は宮の外面的な賛美を述べるといふ片寄った記述からも、作者が「女」であることが窺える。

16 紅葉見物に関する贈答が続く。ここで、『日本古典文学全集』本は、

その夜の時雨、つねよりも木々の木の葉残りありげもなく聞こゆるに、目をさまして、「風のまへなる」などひとりごちて、「みな散りぬらむかし。昨日見で」とくちをしう思ひ明かして

を、宮邸での宮の様子と心中思惟として、超越的視点の部分とみている。ところが、「その夜の時雨」の前は、宮からの手紙が書かれて「……とあるに」と結ばれており、「思ひあかして」の次も、「つとめて、宮より」と、また宮から手紙が届いた記述になっている。さらに、目をさました主体が宮ならば、「御目さまして」とあるはずであろう。このように、文脈の続き具合や、敬語の使い方から考えても、この部分の主体は女であると思われるので、私は超越的視点の例とはとらない。

車宿りで夜を明かし、

③⑧ あはれにものおぼさるるままに、おろかに過ぎにし方さへくやしうおぼさるるも、あながちなり。
(p132)

と宮が思うほど、親密な時を過ごす。ここでも最後に「あながちなり」と、自分の感想を記したために超越的視点も不完全に終わり、作者の姿が露顕している。

17 また、小さな噂が原因の応酬がある。宮は、

③⑨ 「ありつることをはづかしと思ひつるなめり」とおぼして
(p134)

と、手紙を寄こしてくる。これも、例8や9と同じ用法とみられる。

18 女が歌を贈り、

③⑩ 御覧じて、あはれとおぼしめして
(p137)

と、宮が歌を返す。この描写も、宮の「ここにも」という深い共感や、「なほおぼしめし立て」と宮邸入りの勧めの言葉を述べるための補足的なものにすぎない。

19 人々が漢詩をつくるので伺えない、との宮の手紙に対して女はみごとな歌を贈る。宮は、

③⑪ をかしとおぼして
(p140)

歌を返す。右今集と伊勢物語の歌を引いての贈答では、

③⑫ うち笑ませたまひて御覧す。
(p143)

という宮の様子が描かれる。このあたり、二人のびりりあった呼吸が感じられる。女の想像した宮の思惑や様子は、「をかし」「うち笑む」など一語ずつにすぎず、簡単に単純なものではない。

20 宮は女の宮邸入りを実行することにした。

③⑬ 人知れず多させたまふべき所などおきて、「慣らばである所なれば、はしたなく思ふめり。ここにも聞きにくくぞ言はむ。ただわれ行きてゐていなむ」とおぼして、
(p145)

十二月十八日、女に向かって「いざたまへ」と誘う。「人あておはせ」とは急な話だが、宮邸入りについては、お互いに何ヶ月も考へ続けてきたことである。その最後の「女を自分でつれてこよう」という決心は、やはり宮自身の言葉で述べなければ宮邸入りの場面の効果はあがらない。

20、21、22の段落は、女の宮邸入りが次第に波瀾をまきおこし、

ついに北の方が里帰りの準備をするまでが描かれている。20以降では、女が、誰も傷つけずにすむ叙述をしようと努めている。女は、北の方や宮の態度に対して非難めいたことは述べない。「人々おどろきて上に聞こゆれば」とか、「下衆などのなかにもむつかしきこと言ふを聞こしめして」のように、不快なことを言うのは専ら使用人たちであり、北の方は「御心いとつらふ」と思っばかりである。女は、「とかく言ふべきならねば、ただ聞きみたり」と姿勢を保つ

しかなかった。

女房たちの言葉などは混乱しており、述べているのは同一人物なのかどうか明確でない部分もある。鈴木一雄氏は、この部分について、

『和泉式部日記』の超越的視点は内面をめざすものであったのである。『和泉式部日記』は、『蜻蛉日記』で芽生えのまま終わった内面への超越的視点において大きく成功し、すでに『蜻蛉日記』が克服した外面への超越的視点において挫折したのである。⁽⁶⁾

とされた。「日記」文末の注記、

宮の上御文書、女御殿の御ことば、さしもあらじ、書きなした
めり、と本に p151

からも明らかなように、この「日記」を書き終えたのは、超越的視点の挫折ということももちろん一因であろう。しかし、最大の理由は、作者が書こうとしたものを、一応書き終えたからだと考えた。い。

この、宮邸入り後における超越的視点は、用いた目的が異なり、世間への弁解、北の方への遠慮なども含め、こうなるより仕方なかった結末を記すためにとった方法でしかない、と思われる。したがって、これから「日記」内の超越的視点に対して、いくつかの分類を試みるが、宮邸入り後の超越的視点は除外して考えることにする。

*

前節で、私は超越的視点の部分と考えられる三十八例を検討した

が、(ただし「御覧じて」一語だけの場合は、超越的視点の芽生え程度のもとみて、とりあげていない)ほとんどの場合は、宮に関する描写に使われていることが明らかになった。

宮以外の人物に対する超越的視点は、北の方に関するものと、右近の尉に関するものが二ヶ所ずつ、小舎人童と乳母に関するものが一ヶ所ずつ、の計六ヶ所しかない。そして、独自の目的をもつて書かれた乳母の言葉以外は、みな短く、簡単な描写である。右近の尉や小舎人童などの描写は、聞くことのできた範囲の事情にとどまっております。複雑な心理描写が叙述されることはなく、北の方に関する部分は、心情を簡潔に、しかも文脈上の効果を考えて述べるなど、第三者の立場で書いたとは思われない描き方である。

宮に関する超越的視点にも、いくつかの共通点がみられる。まず、心情表現の多さである。三十八例中、心中思惟を示す「おぼす」の語が(「おぼし立つ」や「おぼしつむ」も含む)ないものは、わずか七例である。会話文や行動を示す語をまったく含まず、宮の心中思惟のみの描写は、三十八例のうち半数以上ある。また、行動を示す語も、「御覧じて」「御文つかはす」「御目さまして」「おはしまして」などの簡略な一語にとどまるものが多数を占めている。このようなことから宮の心理描写が、超越的視点の第一の目的であったと推察できる。

宮以外の人物の行動や、会話が聞ける範囲にとどまっているのに対して、宮の心中思惟の描写は女が想像できる場合に用いられている。これも、宮と女が恋愛の対象であったがゆえに可能だったのだろう。当然、複雑な言い回しのもものは少なく、女に対する宮の心境も、「なほえ思ひはなつまじう」「いとほしう」「あはれ」「をか

し」「言ふかひなし」など簡明なものが多い。そして、「あはれ」(例⑧、⑬、⑮、⑳)、「をかし」(例㉑、㉒、㉓)、「かひなくはあらず」のたぐい(例⑨、⑭、㉔)などの語句が、何度もくり返し使われていることから、女の想像範囲で書かれたことが察せられる。

超越的視点の最後に、女側の言葉が記されている例が多いのも特徴の一つである。例④、⑦、⑩、㉕、㉖などが、これにあたり、超越的視点が徹底していないところに、作者である式部の姿が見出される。「日記」を執筆する時には、作者という意識で書いていても、内容が自分の体験した恋愛であるため感情が揺れ、文脈に破綻が生じ、屈折した言い回しになってしまったのだろう。

超越的視点は、女の想像できる範囲で宮の心中思惟を述べたものが大多数を占めること、その他の場合でも、ごく限られた範囲で用いられていることが証明できたと思う。では、いったい何故このような方法をとったのであろうか。

まず第一に、効果的な表現を狙ったと思われるものが挙げられる。その中の一つに、詞書的な用い方がある。超越的視点の描写のあとに、宮の手紙や歌が書かれているものは、十数例もある。単に「……と聞こゆ」「……とあり」のように贈答を交わしていくのではなく、宮側の状況や心境を記すことによって手紙や歌を贈る事情を、より明確に、より詳細に伝えようとする女の意図が働いたのではないだろうか。

超越的視点によって、自分の真の姿が噂とは異なることや、宮の訪れが絶えがちだった様々な理由(主に第三者の中傷による)など、女にとって都合の良い解釈を想像可能な範囲で書き記したと思われる箇所も多い。宮の来訪を躊躇させた事情が、例④、⑤、⑦、⑩、

⑬、⑮、㉗などで述べられており、事情を記すことで時間的な空白を埋める役目を果たしている。

このように、作者は、自ら知ることのできない時間的空白、精神的距離を、超越的視点を使うことによって「日記」を展開させる方法をとったと思われる。場合によっては、無意識に記したこともあるだろうが、大部分は整然とした構成をもつ一つの作品を書きあげるために意図的に使用したのである。詩人である和泉式部の記述態度が生みだした独自の文体が超越的視点であり、それゆえ、この「日記」は式部独特の世界を構築することができたのである。

〈注〉

1 鈴木一雄「蜻蛉日記と和泉式部日記」(『全講 和泉式部日記』所収 至文堂 昭48)

2 注1に同じ。

3 鈴木一雄『たった一人の世の中』(至文堂選書 昭48・p24～p27)

4 木村正中「和泉式部日記の特質」(『日本文学』昭38・2)

5 小町谷照彦「和泉式部日記の方法」(『国文学 解釈と教材の研究』昭44・5)

6 注1に同じ。

〔付記〕

本稿で引用した「和泉式部日記」の本文は総て『日本古典文学全集』本(小学館)に拠り、()内にその頁数を記した。